

1 ベと病

A 生態と防除のねらい

- 1 降雨の多い多湿な条件下で栽培される時期に発生が多い。トンネル、ハウス栽培では努めて換気を図り、発生前から定期的な予防散布を実施する。
- 2 肥料切れすると発生が多くなるので、肥培管理に注意する。
- 3 下位葉から中位葉にかけて発病が多いので、薬剤散布は下葉及び中位葉を主体に葉の表裏に十分薬剤が付着するように行う。

B 耕種的防除法等

- 1 排水と換気を良くし、過湿を防止する。
- 2 プラスチックフィルム等でマルチを行い、地表からの病原菌のはね返りを防止する。
- 3 肥料切れしないように適正な肥培管理を行う。

2 疫病

A 生態と防除のねらい

- 1 本病原菌は、ウリ科作物のほかナス科作物にも寄生して被害を与えるので、多発ほ場での輪作作物の選択に注意する。
- 2 未熟果やつる先に発生しやすく、収穫後輸送中に発病するので、ほ場での防除を十分に行い、収穫果実の選別を厳重に行う。
- 3 湿度が高いと発生しやすい。降雨が続く場合や密植、過繁茂の状態では発生が多くなるので、適正な栽培管理に努め、排水や換気を良くして過湿状態にならないように注意する。

B 耕種的防除法等

- 1 連作する場合は、ウリ科とナス科は相互に伝染源となるので、作物の選択に注意する。
- 2 かん水による病原菌のはね返りを防止するため、プラスチックフィルム等によるマルチを行う。
- 3 排水溝を整備し、高畦栽培をする。
- 4 果実には下敷きをし、果実が直接地表面に接しないようにする。

3 うどんこ病

A 生態と防除のねらい

- 1 一般に生育後期に発生が多く、過繁茂で通風採光が悪い場合に発生しやすい。
- 2 換気が不十分な場合に発生が多いので、努めて換気を図る。
- 3 葉の裏面から発生し始めることが多いので、葉の裏面を良く観察し、発生を認めたら直ちに薬剤散布を実施する。

B 耕種的防除法等

- 1 密植を避け、不要な老化葉はできるだけ除去し、通風採光を良くする。
- 2 ハウス、トンネル栽培では換気を良くする。
- 3 窒素質肥料の多用や偏った使用を避ける。

C 薬剤防除のポイント・注意事項等

DMI 殺菌剤 (FRACコード: 3) は、連用すると薬剤感受性が低下しやすいため、他系統薬剤とのローテーション使用を行う。

4 褐斑細菌病

A 生態と防除のねらい

- 1 やや低温多湿気味の時期に発生する。梅雨期や秋期に多発することが多いので、発病期には発生前から予防的に薬剤防除を行う。
- 2 べと病の発生が本病を誘発するので、べと病の防除を十分行う。
- 3 ウリハムシ等の食葉性害虫は、本病を誘発するので防除する。

B 耕種的防除法等

- 1 ほ場の排水を良くし、ハウスやトンネル栽培では換気を良くする。
- 2 プラスチックフィルム等でマルチを行い、地表面からのはね返りを防止する。

5 ウイルス病

A 生態と防除のねらい

- 1 カボチャのモザイク病は、カボチャモザイクウイルス（WMV-2）とキュウリモザイクウイルス（CMV）及びズッキーニ黄斑モザイクウイルス（ZYMV）によって引き起こされる。いずれもアブラムシの媒介によって伝染する機会が多いので、障壁作物等により、有翅アブラムシの飛来を防ぐことが重要である。
- 2 WMV-2、CMV、ZYMVは、ハサミ等による汁液伝染も起こるので、管理作業の際は十分注意する。種子伝染、土壌伝染はしない。

モザイク病



B 耕種的防除法等

- 1 施設開口部の防虫ネットによる被覆及びプラスチックシルバーフィルム等によりマルチを行い、アブラムシの飛来を防止する。
- 2 育苗期や栽培初期の発病株は速やかに抜き取り、植え替える。
- 3 芽かきや整枝の際に発病株に触れた手は良く洗ってから作業を行う。ハサミ等の管理器具は次亜塩素酸カルシウム溶液または第三リン酸ナトリウム10%溶液で洗う。

C 薬剤防除のポイント・注意事項等

媒介虫の防除（ウリ類虫害の項参照）

WMV-2、CMV、ZYMVに対しては媒介虫（アブラムシ類）の防除を行う。